

〈仲間・暮らし・コミュニティ〉をつくる協同へ

—— 高齢者協同組合とその発展方向を考える ——

日本労働者協同組合連合会理事長

菅野正純

「高齢者協同組合とは何か」ということをあらためて深め、その本格的な発展方向について、一緒に考えていきたいと思えます。

そのために、

①「高齢協はなぜ生まれ、社会的な取り組みに広がっていったのか」を振り返り、

②「高齢者の必要と願いにとって、なぜ協同組合なのか、どのような協同組合か」を検討し、

③その必要と願いを本当に実現できる「高齢協の本格的な確立のために求められる課題」について、考えていることを述べさせていただきます。

一 高齢協はなぜ生まれ、社会的な取り組みに広がっていったのか

（労働者協同組合連合会の提唱から）

高齢者協同組合は、日本労働者協同組合連合会（日本労協連）が提唱し、この提唱に応えた各地域の人の熱い共感と参加の下に生み出されてきました。

労働者協同組合が高齢協づくりを提唱した思ひは、次の点にありました。

◎高齢者の仕事の新たな発展

第一に、「高齢者自身が協同して仕事をする」という自分たちの経験を、地域の多くの高齢者の取り組みとして、新しい形で発展させたいということでした。

「あいち高齢者協同組合（準）」の「設立趣意書」（一九九四年）は、「名古屋市長高齢者保健福祉計画」が示した高齢者の強い就労希望を引用し、「高齢者の就労問題」は一部の特異な階層に対する限定的な問題ではなく、高齢社会の普遍的な課題」である、と高らかに宣

言しました。

「趣意書」では、愛知県高齢者就労事業団の仲間の実践を踏まえて、「日々、規則正しい生活リズムがあること、仲間と声をかけあい互いにアテにされる人間関係があること」「地域に役立つよい仕事」をめざし、自らの出資と自力で、事業経営を継続する、集団を運営しているという意識や責任感」が「元氣さと活力を發揮する原動力」である、という貴重な教訓が記されています。

◎生活全体を支え合う協同

第二は、働くことの協同から、生活全体を支え合う協同へと、高齢者の取り組みを広げたい、ということでした。

事業団・労協でも、体力の衰えなどで、それまでの仕事ができなくなった仲間が寂しく去っていきます。その中で、「仕事ができなくなれば『さようなら』か。引退後も助け合える関係をつくれなにか」という熱い問いかけがおこってきます。

福岡県・柏屋事業団の竹森さんは、仲間の孤独死を

きっかけに、「老人給食」を自ら始め、毎日届けて声をかける取り組みを十五年以上もやってきました。

折からの高齢社会。生活全体の支えあいは、地域の人びと全体の願いとなっていました。

◎地域の人びととの出会いと協同

第三に、労働者協同組合が地域に視野を広げ、地域の人びとと出会い、結び始めたことです。

とりわけ、映画「病院で死ぬということ」を共同制作し、地域の人びとと一緒に上映運動を各地で進めた経験は貴重でした。

この中で高齢者や障害者のケアに取り組む人びとをはじめ、多くの人びとと出会い、交流し、高齢協の構想が豊かにふくらんでいきました。

◎暮らしを支え豊かにする仕事おこし

第四に、労働者協同組合や地域のさまざまな仕事と、高齢者が結んで、より人間らしくゆたかな暮らしと地域をつくっていききたい、という思いでした。

労働者協同組合の中で、高齢者の生活を支える仕事、

事業が確実に広がってきました。ヘルパー、給食、産消提携、パン・豆腐などの「ほんもの・安心」の食べ物づくり、住宅改修などでした。

高齢者の日々の暮らしや人生と結んで、そこから発信される必要と願いに応え、ものづくりやサービス開発、さらに仕事おこしも高齢者と一緒になって取り組む。労働者協同組合と地域のさまざまな仕事、高齢者協同組合が手を携えて進む課題がそこにある、と感じるようになりました。

（時代と社会の必要から高齢協を構想する）

こうした高齢者協同組合づくりの提唱は、私たちの予想をはるかに越えて、大きな共感の広がりを呼び起こし、社会的な取り組みに発展していきました。

その背景には、日本社会そのものが大きな転換点にさしかかっている、という時代の変化があったように思います。つまり、従来型の社会システムや福祉のあり方では、もはや高齢社会を乗り切っていくことができなくなっており、それと共に、人びとの中に新しい

必要と願いが高まってきたことです。

◎人と人のつながりの再生

第一には、孤立から解放されて、人と人とのつながりを取り戻したい、という人びとの願いの強まりでした。

愛知高齢者協同組合の準備過程で組合アンケートをとったところ、「どうしたら友だちが作れるのですか。今まで会社人間で働いてきて、地域に戻ってみたら、そこには仲間がいない。居場所がない」という回答がありました。本当に切実に仲間を求めている、友だちを求めている率直な思いです。

◎人がいきいきと生きるケア、地域福祉

第二には、「寝たきりにならない・させない」「元気な高齢者をもっと元気に」という、新しい介護と地域福祉のあり方への願いでした。

高齢者協同組合の構想を練る中で、私たちはいろいろな先生方の書かれた物を読ませていただきました。そこで「寝たきり」や「痴呆」が決して宿命ではなく、

人がいきいきと生きていくことを支えるケアが存在することを知りました。

三好春樹さんたちの「生活リハビリ」からは、生活と仲間がもつ治療力を、「座って食事をし、座って排泄し、座って風呂に入る」具体的な方法論と共に学びました。

その理論的バックボーンである、竹内孝仁先生の「寝たきり痴呆の本当の原因は閉じこもり症候群と、させられ人間にある」「コミュニティの再建なくして高齢者問題の真の解決はあり得ない」という、力強いメッセージが私たちを揺り動かしました。

今日お見えの木原孝久先生の「わかる福祉の発想」からは、地域の中で人のつながりと当たり前の暮らしが、いかに人間にとって根本的なものなのかということをお教えていただきました。

今では当たり前のように思われているかもしれませんが、子ども、保育所と高齢者施設が併設されている施設での出来事が、その本で紹介されています。子どもたちが二階で寝ているおばあちゃんのところへやってきて、「おばあちゃん、なんで寝ているの？」とあどけな

く聞く。そう言われたおばあちゃんが、「この子をもう一度抱き締めてみたい」と感じて起き上がっていく、というお話でした。

◎かけがえのない「役割としての仕事」

第三に、人と人とのつながりの中で、かけがえのない「役割」としての「仕事」という、新しい働き方への願いです。

グループ「なごん」という女性のインタビュアー集団が作った「日本人の老後」という本には、日本の高齢者が様々に仕事を起こしている姿が表わされていました。

たとえば滋賀県の「湖南学園」という、親と別れて暮らす子供たちの施設での、「おばあちゃん」という仕事です。子供たちが小学校や中学校から帰ってくると、「お帰りをさい」と言ってお迎えしてくれる。そのおばあちゃんがいることで、子どもたちの心が和む。そのおばあちゃんには、また、同時にリサイクルショップと駄菓子屋の店番をしている、というお話でした。

今までの雇用労働という枠にとらわれずに視野を広

げてみると、「役割としての仕事」「人の命を支えて人間を元気にしていく仕事」が、年齢を超えて、いろいろな形で可能になっていることが実感できました。

そして、そのような仕事こそ、あらゆる世代が根底では願っているものであり、これからの時代に成長していく働き方ではないか、と感じられました。

こうして、高齢社会のさまざまな課題に向かい合うなかで私たちは、「人間とは何か」「人間らしい暮らしを支える社会関係とは何か」を深く考える機会を与えられ、「協同」が人間存立の根本であることをつかむことができたのでした。

二 高齢者の願いにとつてなぜ協同組合か、 どのような協同組合か

〈なぜ協同組合か——二十一世紀型の協同組合〉

このように、高齢者が、人と人とのつながりの中で、地域でのあたり前の暮らしと、新しい仕事と役割を獲得していきたい、と願ったとき、「協同組合」というあり方が、きわめて自然な形で選択されることとなりました。

NHK解説委員の村田幸子さんはテレビ番組のなかで、高齢者協同組合のことを、「仕事・福祉・生きがいの協同組合」として、端的に紹介していただきました。高齢者の必要や願いの実現にとつて、なぜ協同組合なのか、二十一世紀の協同組合とはどういうものか。このことは、とことん考えておく必要があるテーマです。

なぜなら、組合員を「お客さん」にして、これに物やサービスを提供する事業体として協同組合がある、という一般的な協同組合のイメージでは、村田さんの

ようなとらえ方はできないからです。

◎人びと組合員が主人公となる協同組合

協同組合とは何かを考へるときに基準となるのは、ICA 国際協同組合同盟が一九九五年にマンチェスターで定めた「協同組合のアイデンティティ」に関する声明」です。これは世界の協同組合人の、長い間の討議の成果でした。

その発端は、一九八〇年のICAモスクワ大会での「レイドロー報告」でした。そこでは「生活協同組合は、スーパーマーケットとどこが違うのか」「営業上の業績をたど上げれば良いということになって、協同組合としての独自性を失い、思想的な危機に陥っているのではないか」という深刻な問題提起がされました。

そこから議論が始まって、一九九五年の「アイデンティティ声明」で、協同組合とは何かについての最終的な取りまとめが行われます。

ここで初めて協同組合が定義され、「協同組合とは、共通の必要と願いを持った人々の自発的な結合体であ

り、共同で所有し、民主的に管理する事業体を通じてその必要と願いを組合員自らが実現して行く組織である」とされました。

◎コミュニティをつくりだす協同組合

あわせて、協同組合原則の七番目に、「コミュニティの持続可能な発展への関与」が、打ち立てられます。こうして協同組合は、共通の必要と願いの下に集まり、お金も知恵も労力も出す徹底した当事者が主人公の組織であると共に、仲間内だけの協同ではなくて、コミュニティをどういうふうに作り上げて行くのか、ということに関与する市民の集団であるということが高く掲げるに至ったのです。

〈高齢者協同組合はどのような社会的役割を果たす協同組合か〉

協同組合は「共通の必要と願い」から始まる、と言いました。高齢者協同組合に集まる高齢者と若い世代の、「共通の必要と願い」は何でしょうか。そこから出

発して、高齢者協同組合は、どのような社会的役割を果たす協同組合として成立するのでしょうか。

◎仲間づくりを目的とし、ベースとする協同組合

第一に、繰り返して確認してきたように、「人と人のつながりを再生する」「仲間をつくる」ことそのものを基本的な目的とし、ベースとする協同組合ではないか、という点です。

◎「いのち」をめぐってコミュニティを再生する協同組合

第二には、その人と人とのつながりが、地域コミュニティの再生へと広がっていく協同組合であることです。

先日、兵庫高齢協におじゃまして、次のようなお話をうかがいました。

高齢協主催のヘルパー講座に、親と一緒に不登校の中学生の男の子が参加して、講座を受ける中で元気づかって学校に戻っていった。クラスでその経験を話したところ、クラスメイトの女子中学生が「私もヘルパー

講座を受けられないでしょうか」と、高齢協に尋ねて来たというのですね。

「いのちの学び」といいますか、単にお金をとって職業訓練を行うということにとどまらない、もっと根本的なメッセージを高齢協が本当に真剣に発していればこそ、そういう反応が還ってきたと思うのです。

これを徹底していくと、そうした「いのちの学び」を通じて、若い世代も高齢者も一緒になって、「いのちが支えられる地域をどう作っていくか」ということまで考え合うところに行くのではないのでしょうか。

◎高齢期の新しい「暮らしづくり」の協同組合

第三に、高齢者が協同して、サービスやモノ全体を総合的にコーディネートして、高齢期の新しい「暮らしづくり」「生活づくり」を進める協同組合である、という点です。

ここでは、個々のモノの共同購入ではなく、人間らしい暮らしと地域の総体を、高齢者発でどう創造していくかということが課題となります。

そうした取り組みは、この失業時代に、人間のいのち

ち・暮らし・人生の視点から「労働」や「事業」を根底から問い直し、その視点からモノやサービスをつくりだし供給していく「生活総合産業」を地域に呼び起こすことにもつながります。

かつて生協がものすごく発展した時代は、農村・地方から多くの若い世代の人びとが都市部に入ってきて、子供を産み育て始めた。折から食べ物そのものが汚染される中で、安全な食べ物を求めて生活者・住民同士が協同すると共に、そういう安全な物を作ってくれる農業生産者を探し出し、提携していきました。

人と人との協同が、生活様式、生産・流通様式を問い直し、コミュニティを再生する取り組みへと展開していったのでした。

高齢者協同組合は、人びとのそうした自覚的な「生活づくり」の協同をさらに大きく進め、社会全体の生産と経済のあり方に根本的な問いかけを発する可能性を持つています。

◎「新しい公共性」を推進する協同組合

第四に、地域・地方自治をベースに、市民が主体と

なった「新しい公共性」を推進する協同組合となる点です。

永戸さん、協同総研の中川先生と一緒に、ノーベル賞受賞経済学者であるアマルティア・セン教授を訪ねました。この中でセン教授が、「公共の課題を社会に提起し、発言していくのが高齢者協同組合ではないか」とおっしゃられたことは驚きでした。

来年いよいよ各自治体は「地域福祉計画」の作成を求められます。そこには高齢者の問題から障害者の問題、さらには、子育て、そして就労の創出といった問題が全部含まれます。

まさにこういう問題こそ、高齢者協同組合が採り上げて提案すべきことではないか。そうした取り組みと議論を通じて、新たな人の出会いが生まれ、高齢協が発展していくのではないかと私は考えております。

三 高齢者協同組合の本格的確立への課題

高齢者協同組合は夢をもって出発したのですが、さまざまな困難が、実際に取り組んでみると発生して来ました。

しかしそれも、実践に踏み出したからこそ、見えてきた課題です。それらを整理し解決の方向を徹底して考えておくことが、高齢者協同組合の本格的確立への展望を開くことでしよう。

〈地域に無数の「たまり場」を〉

一つには、改めて「仲間づくり」ということを、高齢者協同組合の根底中の根底として大事にすべきではないかということです。具体的には、設立当初さかんに言われた「たまり場」を、無数に地域につくりだすことです。

「仲間づくり」といっても、実際にそういう拠点となる場がなければ、人びとは集まってくることはできませんし、仲間をつくることはできません。

先日、東京・町田にある「さくらハウス」におじゃましました。

古い民家なのですが、そこに入ってみると、高齢者の素晴らしい作品が、色とりどりにはりめぐらされています。

そこでは、「男の料理教室」も行われていて、自然に仲間になっていく。やってくる中で、コーディネートターの小菅さんがいま男性陣に「コミュニケーション・レストランを作ろうよ。そのときはあなたもシェフよ」とささやいています。

協同の仲間づくりと学びの中から、新しい事業を生み出していこうという意欲を持たれているところがすごいなあと思いました。

こうした「たまり場」「仲間づくり」を実際に広く取り組んでいこうとすれば、どうしても「CC共済」が必要になってくる、ということもはっきりしてきました。

（顔の見える人のつながりが生きるきめ細かい組織づくり）

第三に、地域の一つ一つから、顔の見える人のつながりが生きる、きめ細かい組織づくりが大切ではないかと感じています。

確かに「全県一本の高齢協」というのが大事だと思います。ビジョンを共有し、広い視野から事業計画を立て戦略を進めていくということが大切なことは、言うまでもありません。

それと同時に、高齢協という協同組合が、組合員・当事者の徹底した主体的な組織であるとするならば、まず地域の中で人と人の関係が形成されていくことが前提になると思います。

地域の一つひとつに「地域福祉事業所」や「たまり場」があつて、仲間づくりが行われているという姿がなく、理事会が一手に高齢協をコントロールするということでは、到底高齢協の運動は進まないというふうに思います。

「地域福祉計画」に参画し、提案するにしても、地

域の具体的な人と人とのつながりと活動が、高齢協の提案に説得力を与えていくことでしよう。

（団塊の世代の参加を今から）

最後に、「新しい公共性の創造」ということにつながつて行くわけですけれども、もう少し中期的に見ると、実は高齢協を最も必要としているのは、私たち団塊の世代なわけです。

今、失業が進み、社会保障制度が崩壊していく。国民の預金や年金基金というのは、もう何に使われているかわからない。実際になくなっているんじゃないかというふうに言われているわけです。

近未来の日本の予測を立ててみると、とても明るいと言えない状況がある。そういう中で、私たち団塊の世代が本当に切実な課題を背負わされるということになると思います。

そういう時代の中にあつて、私たちが六十五歳を過ぎててもやれる仕事をやり、元気なうちは働きながら仲間をつくって支え合う。そして、国民の預金や年金基

このように、さまざまな職種の人々が、こんなふうな人間らしい暮らしを支える仕事がしたい、という主体的な思いから、次々と仕事を起こし、それがネットされていく。そのことで初めて、高齢者の人間らしい暮らしが総合的に支えられていくのではないだろうか。

これらは、決して高齢協の理事会が一つ一つ考えて、労働者を「雇う」というようなやり方で、広がっていくものではない、と考えております。

◎「高齢者の仕事おこし」：地域福祉事業所を場に協同労働で

「高齢者のための仕事」とあわせて、「高齢者自身による仕事おこし」が大きな宿題として残っています。

ここでも大事なことは、まず「高齢者自身も協同労働で仕事をおこす」ということを明確にすることだと思ふのです。自分たちで出資をして、事業計画を立てて、仕事をおこしていく。

問題は、どこからおこしていくかですが、その「場」としてだんだん見えてきたのが、地域福祉事業所では

ないかと思えます。

ケアの仕事の中核としながら、「生活総合産業」をさまざまな面でネットしていく、という地域福祉事業所こそ、「高齢者自身による仕事おこし」と「高齢者のための仕事おこし」が生み出される「場」ではないかと思っています。

実際に、大阪の枚方の実践を見ましても、ケア・ワーカーのひたむきな思いと働き方を見ながら、高齢協の組合員が、例えば百万円出資をした人もいるように、自ら出資をし、自らボランティアで、無償で働く。そして、その高齢協の地域福祉事業所というものを支えていく、というふうになってきたわけですね。

そういう意味で、ワーカーと高齢者と地域の人がとが共に作っていくような、そういう拠点として地域福祉事業所というものが考えられるのではないかというふうに思っています。(16ページ図参照)

（顔の見える人のつながりが生きるきめ細かい組織づくり）

第三に、地域の一つ一つから、顔の見える人のつながりが生きる、きめ細かい組織づくりが大切ではないか、と感じています。

確かに「全県一本の高齢協」というのが大事だと思います。ビジョンを共有し、広い視野から事業計画を立て戦略を進めていくということが大切なことは、言うまでもありません。

それと同時に、高齢協という協同組合が、組合員・当事者の徹底した主体的な組織であるとするならば、まず地域の中で人と人の関係が形成されていくことが前提になると思います。

地域の一つひとつに「地域福祉事業所」や「たまり場」があつて、仲間づくりが行われているという姿がなく、理事会が一手に高齢協をコントロールするということでは、到底高齢協の運動は進まないというふうに思います。

「地域福祉計画」に参画し、提案するにしても、地

域の具体的な人と人とのつながりと活動が、高齢協の提案に説得力を与えていくことでしょう。

（団塊の世代の参加を今から）

最後に、「新しい公共性の創造」ということにつながって行くわけですけれども、もう少し中期的に見ると、実は高齢協を最も必要としているのは、私たち団塊の世代なわけです。

今、失業が進み、社会保険制度が崩壊していく。国民の預金や年金基金というのは、もう何に使われているかわからない。実際になくなっていくんじゃないかというふうに言われているわけです。

近未来の日本の予測を立ててみると、とても明るいと云えない状況がある。そういう中で、私たち団塊の世代が本当に切実な課題を背負わされるということになると思います。

そういう時代の中にあつて、私たちが六十五歳を過ぎてもやれる仕事をやり、元気なうちは働きながら仲間をつくって支え合う。そして、国民の預金や年金基

金がバブル的な投機に使われてバーになっていっているというあり方ではなくて、CC共済という形で、自分たち自身が自前の共済の基金を活用しながら新たな仕事おこしにも連動させていく。そうしたあり方を考えていく必要があるのではないかと思います。

そのように考えると、「新しい公共性の創造」が、高齢協のリアルな挑戦課題となって浮上してきます。またそうした挑戦を通じて、高齢者協同組合の本格的確立が展望されるようになっていくのではないのでしょうか。

